

重なる

第19期生 神谷 愛理

「君はどんな人なのか。」

入ゼミ面接で小野先生から問われた言葉である。この時、震えて泣くほど緊張していた私は、言葉に詰まってしまった。なぜなら、この問いに対して自信をもって答えられるほどの、人としての「中身」がなかったからである。時は立ち、入ゼミから約2年近くなり、卒ゼミが間近となった。現在、同じことを問われたとして、私は、どのように答えるであろうか。

小野ゼミで過ごした濃密な2年間で、私は多くの学びを得ることができた。それは、学問に関する学びだけでなく、礼儀などの一般的教養な学びや、グループ活動における学び、思考力や文章力といった学びなど多岐にわたる。その多くの学びのおかげで、人としての「中身」を充実させることができた。小野ゼミに拾ってもらったころの私とは異なり、あの問いに自信をもって答えることができるくらいには、成長したのではないかと思う。これほどまでに成長できたのは、ひとえに小野ゼミの恵まれた環境、小野ゼミの温かく愛のある人々のおかげである。したがって、ここからは、2年間お世話になった方々への感謝を綴りたい。

まず、20期のみんなへ。私は、後輩指導を上手くできず迷惑をかけてしまった場面が多々あったと思いますが、それでも頼ってくれてありがとう。今後、21期を迎え、20期が新しく小野ゼミを創っていくのが頼もしく、それを見るのが楽しみです。

そして、同期の19期のみんなへ。同期のみんなの優しさには、常々助けられてきました。その優しさに甘え過ぎていた時もあったと思いますが、見捨てずにいてくれてありがとう。同期が一人でも欠けてしまっていたら、今の私はないと思います。この同期と一緒に2年間を乗り越えられたことが本当に幸せに感じます。

次に、大学院生の先輩方、第18期の先輩方へ。ディベートやビジコンに始まり、三田論、そして卒論まで、様々な面で先輩方に支えていただきました。19期が道に迷ったとき、すかさず手を差し伸べてくださって、先へと進む道しるべとなってくださいました。本当にありがとうございました。

最後に、小野晃典先生へ。先生が厳しくも、愛をもって指導してくださったことに、心から感謝しています。特に、卒論執筆においては、同期の何倍ものミスをしてしまう私を、見捨てずに、何度もご指導してくださって、本当にありがとうございました。

改めて、小野ゼミで2年間お世話になった皆様、そして、小野ゼミを繋いでくださった皆様に感謝申し上げます。この温かく、愛の溢れる小野ゼミに入り、充実したゼミ生活を送ることができて、幸せでした。小野ゼミで得たものを、これからの人生においても大切にしながら、より「中身」を充実できるように精進していきます。2年間、ありがとうございました。